

佛教音楽：生命(いのち)の流れとひびき

著者	渡邊 顯信
雑誌名	真実心
号	21
ページ	35-63
発行年	2000-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000618/

佛 教 音 楽

— 生命いのちの流れとひびき —

渡 邊 顯 信

はじめに

皆さん、こんにちは。お手元にレジュメを用意しましたので、適宜ご覧になりながら、耳を傾けていただければと思います。

一 生命いのちの実感 — 最近の世相から —

現代社会の中にはいろんな考え方や生き方がありません。その傾向として、右寄り

とか左寄りとか極端な場合もあります。今問題になっているのが、アルバニアとセルビア民族のコソボ問題です。同じ国家なのですが、民族の浄化という名で互いに相手を抹消しようとしている。コソボ問題に限らず、いままでも、このような民族対立は、何回も繰り返されてきました。しかし、果たして民族の浄化ということは、本当に言えるのでしょうか。

たとえば、身近な例で言いますと、平成七年一月一七日、阪神・淡路大震災がありました。これは不可抗力であり天災です。しかし先に提示したような事件は不可抗力ではなくまったく人災です。オウム真理教による地下鉄サリン事件も同様でした。実は昨日、五月二四日は、神戸で小学六年の土師淳君が殺害された日でした。昨日で三回忌になります。まさしく殺人という犯罪・人災であります。さらには最近、遺伝子操作が話題になっています。遺伝子操作の主な目的は、受精卵をチェックして、障害がありそうな部分を排除するのです。一種の殺人行為に近いことをするわけです。それが現代という世の中の悲しむべき実状です。

科学技術の進展が、果たして人間にとって幸せなことであったのかどうかを再検証

佛 教 音 楽

する必要を感じます。科学技術の進展を支えるのは、経済優先の考え方です。人間には、「物欲」があります。この物欲を重ねてきた結果が、ひよっとしたら科学技術の発達であったのかもしれませんが、このような現状が、我々にとって、全く無関係であったかと問い直してみますと、そうではないのではないのでしょうか。モノを求める我々の気持ちだが、こういう社会を作り出してきたくとも云えます。ある面では、我々にも責任の一端がありそうですね。特に、最近臓器移植の問題が出てきています。今年の二月、高知県の赤十字病院で第一例がありました。先日一二日には慶応大学医学部で第二例がありました。一方では医学技術が進んでいるようですが、他方では手術の患者を取り違えたり、薬剤の投与を間違えてしまったということも、同時に起っているのです。科学技術がいかに発達しても、人間の判断が少しでもズレると、「民族浄化」の名目で平然と殺人行為さえも犯してしまうのです。

さて、皆さんの正面には御本尊がありますね。「南無阿弥陀佛」と書いてあります。御本尊について『光華女子学園五十年史』の中に、次のように説明してあります。

御本尊の名前は光寿無量です。南無阿弥陀佛という六字を中心に六個の輪がありま

す。南無阿弥陀佛の六字が広がっているということです。そして、回りに十二本の光があります。これは佛様の御徳を十二の光で表したもので、お台座には蓮の花びらが副輪十二枚を含めて二十四枚あります。その意味は光明、佛教で言いますと智慧です。智慧が無量であることを示し、寿命もまた尽きることがないことを示しています。

このような御本尊を学園樹立精神の中心にいただく光華女子学園は、現代にとって大切な佛教精神を伝えていく、学んでいく大切な学園であることがわかります。これが皆さんの入学された大学の願いです。どうぞ二年間なり四年間の学生生活の中で、実り豊かな体験を身に受けて行って下さい。

二 佛教とは何か？

初めに、基本的な佛教用語を簡単に確認しておきたいと思います。

「佛陀 Buddha」は、「真実に目覚めた人」という意味のサンスクリット語（パリー語も同じ）です。「Vudh 目覚める」という動詞に過去受動分詞の「ta」がついて「Buddha」となり、それが英語や他の言語に翻訳されていったわけです。佛教は、

佛 教 音 楽

その「真実に目覚められた方の教え」ということです。

(1) 縁起 *pratīya-samutpāda, paṭicca-samuppāda*

「縁起」は一般的に誤用されていますが、本来は良いも悪いもなく、すべての事象がまさしく縁起なのです。サンスクリット語で、*pratīya-samutpāda*、パーリ語で *paṭicca-samuppāda*。お釈迦さまが使われた言語に近いものが、このパーリ語です。

「すべての事象は、種々な要素が集まって生じているもの」という意味です。「誰かが操作したり命令して創作されたもの」ではなく、「色々な要素が集まってできているもの」ということです。ですから縁起の要素には楽しい要素も、幸せな要素もあります。逆に苦しい、悲しい要素もあります。それらすべての「色々な要素によって成り立っていること」が縁起の実態なのです。

(2) 無常 *anīya, anicca*

anīya, *a* は否定の接頭辞です。すべてのもので常なるものは何もない、すべて無常。美しくなるのも無常、醜くなるのも無常。大きくなるのも無常、歳をとっていくのも無常。皆さんは一九歳という年齢を続けるわけにはいきませんね。一瞬、一瞬の

うちにある面では老化しているわけです。「成長」ということも、別な表現をすれば、「老化へのプロセス」ということなのですね。

(3) 無明（無知） *avidyā, avijjā*

縁起の良いとか悪いとか、物事の善悪判断などを、私たちは自己の都合で判定し易いものです。真実に対して明るくないこと、暗いこと、無知であることが「無明」です。

(4) 真実（真理、諦） *satya*

「真実 *satya*」も大切な言葉です。英語の *be* 動詞に当る「*as*」の現在分詞の形「*sat*」に義務分詞「*ya*」がついた言葉で、あるべきもの、あるべき状態を意味します。真実に気づかれた方が覚者であり、佛陀 *Buddha* です。*satya* という言葉で思い出されるのはオウム真理教のサティアンですね。残念ながら、あれは *satya* を間違っ
て理解した解釈です。*satya* には相手を無視したり、殺傷する要素はまったくありません。当事者たちの誤用です。この機会に皆さんには、*satya* を正しく理解していただきしたいと思います。

佛 教 音 楽

三 宗教の本質：「その本質的語義と慣例的語義」

(1) 本質的語義（「宗教」と「Religion」）

宗教という漢字はもともと佛教の術語です。スリランカの名を経名にもつ『楞伽經 Lankavatāra-sūtra』という經典があります。その中に出てくる Siddhanta、意味は「成就（完成）された究極のもの」という術語です。お釈迦様の固有名詞は「シツダールタ Siddhārtha」と申しあげますが、「siddha（成就された、完成された）」と「artha（意義、利益）」の二つの合成語です。御存知の通り卒塔婆に悉曇文字、梵字が書いてありますね。その悉曇と同系の言葉で、完成・成就したものという意味です。その翻訳語が宗教という言葉であります。

一方、Religion はラテン語の religio が語源です。語義分解しますと、レジユメに書いた二つに分けられます。「re（再び）」という意味の接頭辞を持った言葉で、結果的には一緒の語形ですが、語源が違います。そのひとつ「Vleg」は「拾う、集める、観察する」、もう一つは、「Vlig」は「結ぶ、縛る」という語源です。紀元前一世紀の

ローマの哲学者キケロは、最初の意味、「拾う、集める」説を用い、紀元後三、四世紀のラクタンチウスは後者の語義をとっています。アダムとイブが禁断の実を食べ、神の国から追放されました。しかし追放のままに終わらせずに、何とか人間と神を結び付けたいというところから出た言葉が Religion です。人間が神と同じくなることではありません。ですから佛教でいう宗教の意味とは、基本的に相違があることを理解していただきたいと思えます。

(2) 慣例的語義

我々は明治以降、Religion という言葉を「宗教」とした翻訳語をそのまま受け継いでいますが、さきほど申しあげたように厳密には語義の違う言葉でした。慣例的には「啓示 (Revelation) の宗教」と、「目覚め (自覚 Buddha) の宗教」という二つの考え方になります。Revelation は、まさしく今まで覆い隠されていたものが神の力で出てくるものですから、それはあくまでも神の恩寵によって示されたものに従うことを意味します。一方、佛教の方はそうではなく、すべて縁起によって成り立っているという真実に目覚めること。それが佛教のいう宗教です。佛教では目覚めさえす

佛 教 音 楽

れば佛陀になれるわけですから、あなた方お一人おひとりが佛陀になる要素を持っているという教えです。卑近な説明を加えますと、両親の命を引き継いで現にある自分の生命の大切さに気がついていくこと、それが佛教の道であります。

四 人生と音楽 — 人間にとって音楽とは？ —

私たちは、音楽を楽器演奏や歌で聴かせることだけだと思いがちですが、ここで一つ皆さんにお尋ねいたします。人の前で一人で歌えるという自信のある方は、挙手してみてください。いかがですか？

自分の能力を知っていると、持っていないものを持っているかのように見せるのは辛いことです。そこで皆と一緒になら大丈夫かなということになる。しかし、この「皆と一緒に」ということが大事なことです。その辺を確認してみたいと思います。

ドイツの作曲家バッハは、「音楽は精神の中から日常の塵埃を掃除する」と述べ、イギリスの詩人バイロンも「葦のそよぎにも音楽あり。小川のせせらぎにも音楽あり。人もし耳を持ちなばものみなすべてに音楽あり」と述べています。またある先生は

「音楽は生きる気力の源であるだけでなく、融和と希望の泉である。個人を越えて高い普遍性を表す名曲は、人々に肉体の存在と人生の本質を気づかせる」とも言われています。

こちらに伺うタクシーの中で、FMで音楽が流れていました。運転手さんは軽妙な方で、「クラシックファンじゃないが、精神が落ちつくんです」と話してくれました。私はありがたい言葉をお聞きしたなと思いつつながら、こちらに参りました。音楽の本質はそういうところにあると思うのです。真実の音楽は人間の精神を、また感性を高める作用を持つているのです。そして、本当に心うたれる音楽、感動的なものは威圧的に命令調で押しつけられるものでは決してありません。大上段に構えて押しつけられるものではありません。謙虚に相手の意見を聴ける姿勢、親友同士の意見交換と一緒の姿勢、投げかければ考えてくれる。自分なりの考えを伝えてくれる。交感の世界です。それが音楽の本質的な作用です。謙虚に聴き合える、頷き合える世界、感応し呼応し合える世界に自然に流れている響きが、音楽の本質の一面であります。

佛 教 音 楽

一 佛 教 音 楽 と は ?

一 佛 教 音 楽

佛教とは、「眞実に目覚めた方の教え」という意味でした。目覚めるということは周囲の事実気がつく、知ることです。暗い思いだったが事実を知ったら目からウロコが落ちた、即ち眞実に目が覚めた。それが Buddha であり、その教えが佛教でした。音楽は眞実のひびき、生命のひびきの表現です。心にしみる響き、その心の交流を楽しむ。「楽」という漢字には「願い」という意味があります。ただ楽しいだけではなく、その根底には願いがあるのです。楽しいという世界を願うこと。音楽は響きをお互いに楽しみ、願っていく世界。それを表す方法として器楽や声楽があり、眞実の響きを伝え合い、深め合うわけです。佛教音楽はなおのこと、眞理に目覚めた方の教えを、お互いに納得しあえる響きを通して楽しんでいく。それが佛教音楽の基本であります。

(1) 釈尊と音楽

では、お釈迦さまの時はどうだったでしょうか。紀元前四、五世紀の頃ですから、現代的意味での音楽のパターンはありません。そうではない別のパターンがあります。インドの「古代宗教詩集」「リグ・ヴェーダ」という文献の名をお聞きになったことがあると思いますが、詩は韻律を伴い、音楽に直結します。人間がものを覚える時、たとえば、歴史年表をごろ合わせで覚える。リズムに置き換えますね。それも音楽の一種です。釈尊の時代のものが残っているというわけではありませんが、信仰心表現の事例が記録されています。經典の記述事例を引用しましょう。

(2) 經典記述事例

パーリ語原典。これは、釈尊の教義を言葉にして伝えるために集大成された最初期の經典群です。その中の長部經典 *Dīgha-nikāya* の中に「帝釈所問經 *Sakka-pañha-suttanta*」という經典があります。

パンチャシカという音楽神の子どもがおりまして、歌も楽器のヴィーナも巧みでした。彼が自分の信仰心を弾き歌いをしていました。それを聴かれた釈尊が感想を述べられ

佛 教 音 楽

ました。

「パンチャシカよ、いま、汝の「弾いたベールヴァ製の黄色いヴィーナの」絃の音色は、汝の歌声と調和し、歌声は、絃の音色と調和していた」と。

一般的に美声の持ち主は自分の美声を強調したがりです。楽器演奏に自信のある人はそれを強調したがりです。しかし、パンチャシカが演奏したのはそのようなものではなく、自分の心を演奏した。それを聴かれた釈尊が、「ハーモニーしていた」と感じられた。これはすばらしい表現です。更に続きます。「しかもパンチャシカよ、「汝の」その絃の音色は歌声の音色に勝らず、歌声は絃の音色に勝ったものではなかった」と。そこまで分析されています。パンチャシカの心の思いがそこに表現され、釈尊の心に「伝わった」という事実の例です。

(3) 結 集

釈尊ご入滅直後に初めての佛典編纂会議、「結集」^{けつじゅう}が開催されました。原語は「Sangiti」で「共に歌い合う」という意味です。この「Sangiti」という言葉が使われたのは非常に大きな意義があります。釈尊の直説を聴き、記憶していた人たちが

五百人集まりました。知識や経験の浅い人や深い人も居られたことでしょう。皆さんがお持ちの『聖典』二九頁の「佛説阿弥陀經」の冒頭にもありますように、すべての經典の最初は「如是我聞」(このように私はお聞きしました)という一節から始まります。五百人の人々が集まって確認しあったのです。そこには、聴き合い、確認し合うハーモニーの世界が実現したことでしょう。それが今、經典という形で我々の手元に伝持されているわけです。

『Sanskrit-English Dictionary (梵英辞典)』では、singing together, concert, symphony と英訳されています。「symphony」は、[sym (共) + phony (音)] で、「競う」ではなく「合わせる」ことです。symphony は「交響」と翻訳されていますが、個人的解釈ではありませんが、私にとりましては佛教精神の発露でもあると理解しております。しかし誤解されないように補足しますが、いま私が申しました佛教精神という言葉は、佛教だけが正しいというセクシヨナリズムの意味ではありません。真実に目覚めた人の教え・精神という意味であります。

佛 教 音 楽

二 佛 教 音 楽 — その流れ —

(1) 概 説

次に、佛教音楽についての歴史的事実の流れを、レジユメに沿って概観してみたいと思います。佛教音楽は、紀元前から現代に至るまで、儀式音楽を含めて非常に大きな影響をアジアの文化に伝えました。例えば日本では、浪曲にもその影響が見られます。

インドのリグ・ヴェーダ時代以降、その哲学思想環境の中で萌芽した佛教は、紀元前三世紀頃マウリア朝のアショーカ王時代から紀元後二世紀頃のクシャーナ朝のカニシユカ王時代頃が最盛期でした。その頃の遺跡に彫刻の形で残っています。例えばサンチーヤガンダーラ、そしてアジャンター、エローラ等の遺跡レリーフに、佛教音楽の流れを見ることが出来ます。

インドからスリランカに伝わった佛教を南方佛教または南伝佛教と云いますが、詳しくは「Theravāda（上座部又は長老派）佛教」と云います。戒律を遵守した therā

（長老）を中心に運営されている佛教の流れです。往々にして南方佛教を小乗佛教と言いますが、この小乗（ヒーナヤーナ）という言葉を使うのはおやめいただきたいと思います。ヒーナヤーナ、即ち「小さな乗り物」という意味で、マハーヤーナ、「大きな（勝れた）乗物」と自認する大乘佛教の立場からの蔑称なのです。大乘が正しくて小乗が劣っているという意味が込められているのです。実際にはそうではなく、時代性や地域性をもたらす相違があるだけで、基本は佛陀の教説ですから、両者に優劣はありません。さて、「Theravāda 佛教」伝承の教説の中に佛教音楽の数例をたずねてみましょう。初めに皆さんも御存知の「三帰依文」（Tī-saraṇa）があります。

Buddham saraṇam gacchāmi 私に佛に帰依いたします。

Dhammam saraṇam gacchāmi 私は法に帰依いたします。

Sangham saraṇam gacchāmi 私は僧伽に帰依いたします。

Buddhaは佛陀、Dhammaは法・教説、Sanghaは集まりですので、「三宝（佛法僧）帰依」とも申します。特に僧は僧侶を含めて「佛法を中心に集まった人々」という意味です。saraṇaは拠り所、安心できる場所。佛陀を拠り所として「gacchāmi 私

佛 教 音 楽

は「生活して」行きます」という意味です。gacchamiの語尾 *mi* は一人称単数形で
すから、私、個人のことです。個々人が佛の教えを拠り所にして生活していきますと
いう意志表示であり、「自覚の宗教」の基本姿勢でもあります。

ところで、皆さんが無意識に使っているパーリ語を一つ紹介しましょう。禅宗等では
お酒を般若湯といいますが、この「般若」はパーリ語の *pañña* で「智慧」という
意味なのです。このように私たちが日頃、それと知らずに佛教用語を使っていること
が案外あるのです。興味のある方は、ご自分でも探してみてください。

次に引用したのは、「法句経 Dhammapada」の第五偈です。

Na hi verena verāni sammant' idha kudācanam,

まことこの世では、怨みによっては、怨みは決して消える（しずまる）ことはない。

averena ca sammantī, esa dhammo sanantano.

怨みより離れてこそ消える、これが永遠の真実（教法・基本）である。

この偈文は、一九五一（昭和二六）年のサンフランシスコでの対日講和会議の席上
で、後にスリランカの大統領になられた Jayawardene 氏が、賠償請求権放棄の演説

の中で引用されて、各国代表に多くの感動を与えたことでも有名になっております。

タイ・ビルマを含む東南アジアに伝えられた佛教は、一〇世紀頃までは盛んでしたが、一一世紀以降はイスラム教などの影響で廃れていきました。しかし、幸いにもアンコール・ワットやボロヴドゥール等の遺跡にその事実が残されています。

一方、インドから北方に伝わった北伝佛教は、チベットや中央アジアを経て、中国に伝わりました。チベットは秘境でしたので特殊な伝わり方をしています。打楽器も含めて、楽器を伴います。通奏低音の深い宗教的な雰囲気醸し出される作品が少なくありません。中央アジアには三世紀頃、ガンダーラ経由でトルキスタン、パミール高原、カラコルム、タミール盆地、ウイグルを経由して中国に伝わり、特に佛教美術のテーマにもなつて行きました。

中国へは、前漢時代に佛教が伝わっていますが、儒教や道教と拮抗しながら、お互いに影響を与えながら広がり、クチャとかカシユガル、トルファンの音楽にも影響を与え、唐の時代には音楽国と言われるほど盛んになりました。西域地方の作品とか演芸と重なつて散楽という形態も流行しますが、朝鮮、韓国を経由したそれは、日本に

佛 教 音 楽

入り猿楽、田楽となり、鎌倉時代には、能楽・狂言となって行きます。

(2) 声 明

日本に伝来したインド文化の学問体系は、レジュメに書きましたように五明 pañca-vidya に分類されます。その基礎となるものが「声明 Sabda-Vidya」です。「声（言語・音韻・文法）を明らかにする」という意味です。佛教儀式にとり、声明は重要なものですが、当初は儀式執行資格者が居なかつたために、海外から招きました。奈良時代、天平勝宝四（七五二）年四月九日の東大寺大佛開眼供養法要の導師は、インドのバラモン僧 Bodhisena 菩提遷那でした。これ以降、日本でも公式に戒律を授ける制度が整備され、現在の日本佛教に発展しております。

当初は「声明」の呼称はなく、インドの音楽すなわち「梵唄（ほんはい）」と呼ばれ、その記譜法は「博士（はかせ）墨譜」と云われておりました。

(3) 近・現代のあゆみ

このようにして伝承されて来た佛教音楽の近・現代の歩みを見ておきましょう。

明治時代、佛教関係者が中心となり、佛教童謡や佛教唱歌が盛んになりました。明

治三五年、東京浅草九品寺内に佛教音楽会が創設されました。大正時代には、「佛教唱歌」が「佛教讃歌」とも云われてきます。大正デモクラシーの風潮の中で、「童謡とか唱歌の世界」がそれぞれの発展期を迎えます。唱歌タイプの雑誌「赤い鳥」掲載の詩に対して山田耕作、成田為三、弘田龍太郎が曲をつけ、童歌タイプの雑誌「金の星」には中山晋平とか本居長世などが作曲しています。このような洋楽家の台頭と一緒にになって大正時代に佛教音楽の気運が高まってきます。さらに昭和に入り、三（一九二八）年に文部省宗教局の中に佛教音楽協会が設立されました。昭和一五年までの十数年間に、一一回にわたり創作作品が発表されました。その実例として、『佛教聖歌第一回発表』（「雑祭りの歌」、「朝の歌」）、この楽譜集が第一回のもので、第二回目はこのように大型になって佛教聖歌一篇が発表されています。この中には「佛教青年会会歌」も入っています。第九回までの歌の楽譜だけをまとめて縮刷版にしたものがこの冊子本です。

昭和一五、一六年は第二次世界大戦の直前、世相は厳しい状態でしたが、佛教音楽協会が果たした役割は見事だったと思います。

佛 教 音 楽

第二次世界大戦後、大谷楽苑が昭和二二年に創設されました。「社会が混乱していた時代に」です。昭和二〇年八月一四日までの日本の姿勢が、翌日の八月一五日以降、一八〇度の変更を余儀なくさせられたわけです。皆さんも自分の生活の方針が正反対になることを想像してみてください。当然混乱しますよね。「社会の混乱に翻弄されている人々を何とか救いたい、癒したい」という願いを持たれた方が、大谷光暢ご門主・智子裏方でした。御両方は音楽でその願いを実践するために大谷楽苑を創設されました。光華女子学園も大きなご縁がありました。その後、昭和二八年には、光華女子短期大学・大谷大学・龍谷大学・京都女子大学の合唱団が集まり、京都学生佛教音楽研究会も結成されました。音楽を通して少しでも自分たちの周囲の意識を高め、佛教音楽の精神を知っていただく目的でした。しかし残念ながら私どもが卒業した数年後、活動がストップしてしまいました。しかし親鸞聖人の七〇〇回忌の昭和三六年に大谷派では、新たに大谷派合唱連盟が、そして西本願寺には佛教音楽研究所が設立されました。

そういう活動の中から発表された作品の一例を、釈尊関係、佛弟子関係、親鸞聖人

関係、そして蓮如上人関係にまとめてレジュメに挙げておきました。昨年は蓮如上人の五〇〇回忌でしたから久しぶりに新しい作品も発表されています。

ところで、このような佛教音楽をめぐる現在の状況は、平均して楽観できるものではありません。視点を替えてみましょう。家にピアノを持つておられる方が多いと思います。では、そのピアノが今活用されて音を発していますか。埃まみれになっていないでしょうか。またカラオケに行っても、マイクを一人じめにしたり、歌手をまねして歌っているだけではないでしょうか。カラオケでアンサンブルを楽しむのは難しいかもしれない。自分が歌って皆が同調してくれるカラオケよりも聴いている人を無視して、自分の歌を押しつけているだけで、交替しても、一生懸命歌っている人を無視して雑談してしまうことはいないでしょうか。音楽の世界に居りながら、仲間を無視する行動をとっては、いけないでしょうか。そのことが現代の人間性喪失問題の一因ではないかと思います。せっかく集まって歌うわけですから、共通の気持ちの交流を持ちたいものですね。そういう意味でも、ぜひ今後は、聞き合うというアンサンブルも試みて下さい。

佛 教 音 楽

二 佛 教 音 楽 — そのひびき —

それでは実際に佛教音楽の演奏を聴いていただきましょう。

これは、伝統的な日本の家族関係を、日常生活を通して歌いあげている作品です。

大谷楽苑が昭和二二（一九四七）年に選定した作品で、演奏はポニージャックスと東京の荒川の子どもたちの合唱です。

ほとけさまは 森山 美苗 作詞 弘田 龍太郎 作曲（大谷楽苑選定）

一、ほとけさまは どこにいらつしやる

春は 花咲く 枝のもと ララ

夏は 水辺の 草のかげ ララ

秋は 空ゆく 雲の上 ララ

冬は 窓うつ 雪の中 ララララ

いつも どこかで みていてくださる

いつも 何かを おしえてくださる

ほとけさまは

あれあれ あそこに いらっしやる

二、
ほとけさまは どこに どこに いらっしやる

お眉 ま白な おじいさま ララ

お目々 やさしい おばあさま ララ

お胸 豊かな お父さま ララ

お手々 清らな お母さま ララ

昼でも 夜でも 守ってくださいる

いつも あなたを 支えてくださる

ほとけさまは

あなたの おそばにいらっしやる

佛 教 音 楽

他に数曲用意しましたが、時間の関係で割愛させていただきます。

む す び — 佛教音楽 その目的 —

私の子ども時代はほとんどの家庭が大家族制でした。ですから、お年寄りの方々と一緒に生活を通して、歳をとるとはどういうことか、体が不自由になるとはどういうことか。出産も自宅出産が多かったですから、子どもなりに誕生ということはずいことだなと感じることが出来ました。生まれることも病気になることも老化することも、生病老死すべてを家庭を中心とした地域社会の中で学んできました。

一九四五年八月以降の日本は経済発展が最優先化され、核家族制が中心になりはじめました。親と子だけの世界になってきました。そうなると老化するという事象に若い時代が触れる機会が少なくなりました。ある方が「日本の文化をだめにしたのは水洗便所だ」と断言して居られました。昔の便所はくみ取り式でしたから大小便が見えるんですね。自分の体を維持するためにいただいた食事の老廃物で健康状態も知るこ

とが出来ました。今は水洗便所のために見る機会もない。汚いものとしてすぐに取り去ってしまう。不自由なものは無視してしまう。劣るものは人間じゃない。そういう思いになりやすい。そうではなくて、一匹の魚でも食い散らすのではなく、その一匹の魚が私に下さっている尊い生命いのちを知れば、まさしく「いただきます」という気持ちになりますね。堅い骨くらいは残しますが。食い散らすことはその生命を無駄にすることです。環境問題も含めて決して人間にとってもいいことはありません。

二〇世紀は、物理学の時代だったという人がいます。一九世紀の終わりの段階では、すべての科学的な発明発見はほとんどなされたと思っていたわけです。ところが一八〇〇年代後半、アインシュタイン等多くの学者が出てきました。物理学時代の到来です。量子物理学が原子爆弾を作り、今の科学兵器を作り、コンピュータを作った。そういう利便性の方に我々の目が行ってしまった。老廃物を汚いもの、劣ったものとのみ見捨てるとするならば、我々の、そして皆さんの将来はますます閉鎖的なものになると思います。そうではなくて、ありのままを生かしていくこと、その精神をぜひ光華で学んで、ご自分の体の中に入れてみて下さい。痛みを持った人に対しても、単に

佛 教 音 楽

同情ではなく理解すること、それが佛教の精神でもあります。理解することで相手の方と交流できるのですね。

数年前亡くなられたマザー・テレサの経験ですが、道端で倒れている老婦人を抱きかかえてあげた。その老婦人は、人間として尊厳を認められたことを実感して安らかな表情で亡くなっていったそうです。人間にとり、その尊厳を認められずに死んでいくほど、寂しいことはありません。個々に与えられたこの大切な生命を、次の世代にバトンタッチする責任が、私たちにあるのです。

教言として挙げておいた何人かの方の言葉の中から一つ紹介しましょう。

——自分の番——いのちのバトナー——(相田みつを)

父と母で二人

父と母の両親で四人

そのまた両親で八人

こうして数えていくと

一〇代前で、一〇二四人

二〇代前では…？

なんと一〇〇万人を超すんです

過去無量の

いのちのバトンを受けついで

自分の番をいきている

それがあなたのいのちです

それがわたしのいのちです

一〇代遡るだけでかなりの数の親たちがいます。その親たちから受け継いで来たこの大切な生命^{いのち}。その生命のバトンを次の皆さんのお子さんたちにぜひ伝えてあげてください。子供は父親よりも母親から大きな影響力を与えられるものです。「安心」という字があります。「ウ冠の中の女」と「心」ですね。心が安らげる状態のことです。

佛 教 音 楽

最終的には自分の願いや、相手の願いのひびきを、嘘偽りのない思いの響きを相互に伝え合うこと、これが真の交流であり、音楽の本質的世界であり、佛教音楽の目指す世界でもあります。

数年間の恵まれた学生時代に、ぜひ生命いのちのバトンランナーであることを自覚されて、ご自分なりのバトンを磨き、次の世代に渡してあげて下さい。それが今まで育まれてこられた皆さんの責任でもあり義務でもあると思います。長時間にわたり御静聴くださいまして、ありがとうございます。

——一九九九・五・二五——